

『お伽話の結末は』

著：神香うらら

ill：明神 翼

腕時計を見ると、式の開始までまだ十五分ほどある。

(……ちょっと外の空気吸ってこようかな)

壁際で一人ぽつんと突っ立っているのも居心地が悪いし、会場の熱気や喧(けん)噪(そう)に少々人酔いしてしまった。

飲みかけのワインのグラスを持ったまま、十里は出口に向かった。

「あ……すみません」

見知らぬ中年の男とすれ違いざまに軽くぶつかり、慌(あわ)てて謝る。しかし男は連れの女性との議論に熱中しており、十里には気づかずに行ってしまった。

咎(とが)められなかったことにほっとしつつ、十里は予期せぬアクシデントに困惑した。

(どうしよう……)

手に持っていた赤ワインのグラスが男とぶつかった拍子に傾き、上着の胸元を濡(ぬ)らしてしまったのだ。もう一度壁際に戻(もど)り、ハンカチで胸元を拭(ふ)く。

幸い上着のほうはハンカチで押さえるとほとんど汚れは目立たなくなったが、真っ白なワイシャツには赤い染みが広がっていた。

パーティーはまだ始まったばかりなのに、こんなみっともない格好でいるのはまずい。かといって替えのシャツも持っておらず、十里は途(と)方(ほう)に暮れて自分の胸元を見下ろした。

「———ワインを零(こぼ)したのかい？」

ふいに頭上から降ってきた低い声に、十里はびくりと肩を震わせた。

顔を上げると、見知らぬ長身の男が十里を見下ろしていた。

男を見上げ、十里は息を呑(の)んだ。あまりにも美しく、印象的で———。

青(せい)灰(かい)色(しよく)の澄んだ瞳、高い鼻(び)梁(りょう)、やや厚めの肉感的な唇。精(せい)悍(かん)な顔立ちには女性的なところは微(み)塵(じん)もないが、「美しい」という表現がぴったりだった。

緩(ゆる)やかにウェーブのかかった金髪が美貌に華やかさを添え、白い襟(えり)元(もと)から覗(のぞ)くがっしりした首、広い肩幅と厚い胸板が、タキシードの下から男らしい肉体の熱気を発している。

「……………」

美しく、それでいて雄(お)々(お)しく野性的で……十里は声もなく見とれてしまった。

出会ったばかりの他人に見とれてしまったのは初めてだ。それくらい、男の存在感は圧倒的で強烈だった。

「フランス語は話せない？」

男が柔らかく微(ほほ)笑(え)んで、英語で問い掛ける。

「い、いえ……、あの、ワインを零(こぼ)してしまって……」

慌(あわ)てて十里はフランス語で答えた。男にじっと見つめられ、緊張で声が上(うわ)擦

(ず)ってしまう。

「そのようだね」

男の手がすっと伸びてきて、十里の上着の襟を軽く引っ張って被害状況を検分する。

「……っ」

大きな手に驚いて、十里は一步後ずさった。上品なコロンの香りが、ふわりと鼻(び)腔(こう)をくすぐる。

「ああ、これは失礼」

十里が怯(おび)えたと思ったのか、男は襟から手を離し、何も危害は加えないよと言うように両手を挙げる。

「おいで。ホテルのスタッフに頼んで、替えのシャツを借りよう」

「え……そんなことできるんですか？」

「このホテルなら可能だろう。ああ、ちょっと」

男が通りかかったギャルソンを呼び止める。十里のシャツを示して事情を説明すると、若いギャルソンは笑顔で頷(うなず)いた。

「替えのシャツをご用意いたします。控(ひか)え室へどうぞ」

「あ、ありがとうございます……っ」

ほっとして、十里は男に礼を言い、ギャルソンの後を追った。

こういった高級ホテルのサービスはよく知らなかったので、男が声を掛けてくれて助かった。恩師の受賞パーティーを、赤ワインの染みの付いたワイシャツで過ごすという事態を避けることができそうだ。

(なんか……王子さまみたいな人だったな……)

俳優やスポーツ選手を“王子”と表現することがあるが、彼は子供の頃に読んだお伽(とぎ)話(ばなし)に出てくる王子を彷彿(ほうふつ)とさせた。

見た目が秀(ひい)でているだけではない。仕立てのいいタキシードを隙(すき)なく着こなし、物腰が優雅で洗練された美しいフランス語を話し……ほんの短い会話からも、彼が上流社会の人間であることが窺(うかが)えた。

その上、困っている十里を助けてくれた。着替えて会場に戻ったら、彼を探してもう一度礼を言おうと考える。

(このパーティーの出席者ということは、あの人も研究者なのかな。だとしたら、何を研究してるんだろう)

内気で人見知りする十里が、今日会ったばかりの他人に興味を持つのは珍しいことだった。

(別に……彼とどうこうなりたいてわけじゃないけど)

会場を出て長い廊下を歩きながら、苦笑する。

———十里は、男性しか好きになれない。

しかし彼は、今まで好きになった人とは全然タイプが違う。十里が好きになるのはいつも中性的な線の細いタイプで、彼のような男らしくて堂々としたタイプはどちらかというと苦手だ。

なのに、こんなにも印象深いのは……彼が有無を言わず人を引きつける魅力を持っているからだろう。

控え室に案内され、しばらく待っていると制服を着た従業員が十里のサイズに合いそうなワイシャツを持ってきてくれた。

会場に戻った十里は、ほどなくして彼の正体を知ることとなった。

ちょうど受賞者の紹介とスピーチが始まり、その中に彼の姿を見つけたのだ。

———レイモン・ド・モントリュユ、三十五歳。パリの大学で博士号を取得、博士論文を本にまとめたものが注目を浴び、以後、現代思想の若き論客として国内のみならず海外でも名前を知られるようになる。三年前に初の文学作品を上(じょう)梓(し)し、難解な内容ながらベストセラーとなり、熱狂的なファンを獲得———これらの情報は、後にインターネットや著作のプロフィールなどから得たのだが。

(哲学部門の受賞者だったんだ……)

大勢の人に囲まれるレイモンに気(き)後(おく)れし、十里は声を掛けるのを躊(ちゆう)躇(ちよ)した。あのアクシデントがなければ、口を利(き)く機会もなかったであろう相手だ。

「あれがレイモン・ド・モントリュユか。噂(うわさ)には聞いてたけど、すげえいい男だな」

「ああ、学術賞の授賞式だったのに、一人だけ俳優が交じってる感じだ」

会場をうろついていた同じ研究室の学生たちも戻ってきて、小声で囁(ささや)き合っている。

受賞者の紹介とスピーチが終わり、会場内から大きな拍手が湧(わ)き起こる。後は歓談の時間だが、受賞者たちはさっそく大勢の客に囲まれてその姿が見えなくなる。「うーん、うちの教授のところにもたどり着けそうにないな。一緒に写真撮りたいんだけど」

ヴィシャールが、背伸びをしてため息をつく。

「パーティーが終わる頃にはきっとたどり着けるよ」

「じゃあそれまで腹ごしらえしておくか。十里もなんか食べる？」

デジタルカメラを胸ポケットにしまい、ヴィシャールが立食形式の軽食が置かれたテーブルを指す。

「僕はあんまりお腹減ってないからいいよ」

「そうか、じゃあまた後で」

「うん」

再び壁際に一人になり、十里は所在なげに視線を彷徨(さまよ)わせた。

シャンデリアの煌(きら)めきと大勢の人々のざわめき、上等なシャンパンの芳香に、夢の中を漂っているようなあやふやな気分になる。

長い睫(まつ)毛(げ)を伏せて、十里はぼんやりと物思いに耽(ふけ)った。じっと見つめていると絨毯の模様がxやyに見えてきて、今取り組んでいる方程式が脳裏に浮かぶ。

「十里」

ふいに名前を呼ばれて、十里は顔を上げた。辺りを見回すと、人混みの中から研究室の准教授が手招きをしている。

「おいで、私の学生時代の同級生を紹介するよ」

慌(わ)てて頭の中の数字や記号を振り払い、十里は准教授の元へ向かった。

「……っ！」

准教授の隣で穏やかな笑みを浮かべていたのは、レイモン・ド・モントリュユだった。

本文 p14～21 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>